

日本文学を

世界文学として読む

Reading Japanese Literature as World Literature

平成30年12月3日（月）－12月25日（火）

大阪市立大学学術情報総合センター 2階

◆世界文学入門

【1】張隆溪著,鈴木章能訳『比較から世界文学へ』水声社2018(3F開架新体系901.9//C52//9683)

本書は *From Comparison to World Literature*(SUNY Press, 2015)の全訳で、著者は張隆溪(チャン・ロンシー/Zhang Longxi)一比較文学、「世界文学」の世界的権威で、現在の国際比較文学学会会長(2016-2019)である。一地域に縛られた文学理解・人間理解は、偏狭な自己愛や自民族中心主義を導きやすいが、世界のさまざまな文学的伝統のもとに生まれた作品・人間を理解するための読み方や比較考察の方法は、人類の平和の促進になる。「類似性」と「差異」とは表裏一体であり、視野を世界規模に広げることが重要なのだと、古今東西の事例を縦横無尽に横断しながら説明する。(堀)

【2】野中進,靱内裕子,沼野恭子編『世界のなかの日本文学：旧ソ連諸国の文学教育から』埼玉大学教養学部2016(7F新体系910.4//N95//0979)

日本文学は、海外の教育現場でどのように教えられ、読まれているのか。ウクライナ、リトアニア、ベラルーシなどの7つの旧ソ連諸国の文学教育の現場の事例が紹介される。使用テキストも、古典・現代文のみならず、俳句や諺、児童文学そしてマンガに至るまで多種多様で、文学史の時代区分や基本概念の定義、作品の解釈なども日本の一般概念と異なって興味深い。世界のなかの「日本文学」という点のみならず、翻訳、教育、比較文学、言語学に関心を持つ人にすすめたい。(堀)

【3】曹泳日著,高井修訳『世界文学の構造：韓国から見た日本近代文学の起源』岩波書店2016(3F開架新体系910.26//C52//7009)

本書の「日本語版序文」には、韓国で2010年頃に生じた「世界文学」をめぐる論争、「韓国文学の世界化」を求める機運に対する違和感が、本書執筆の背景であると書かれている。「世界文学」の地位を獲得している日本文学と、韓国文学との違いは何か、「世界文学の構造」はどのようなものか、ゲーテやマルクスに始まる「世界文学」と現代までの歴史的経緯とは如何なるものかを論じたもの。(堀)

【4】日本比較文学会編『越境する言の葉：世界と出会う日本文学』彩流社2011(3F開架新体系910.4//N71//7239)

日本文学は海外でどのように読まれているのか、いかに受容されてきたか。日本比較文学会六〇周年を記念して編纂された本書は、38名もの日本内外の比較文学者が、多様な切り口で世界のなかで息づく日本文学・日本文学作品を紹介する。「比較文学」研究の前線と辺境(フロンティア)についての地球規模の情報に触れて、想像力を刺激される。(堀)

【5】西成彦『外地巡礼：「越境的」日本語文学論』みすず書房2018(3F開架新体系910.26//N81//5805//西田蔵書)

本書は、日本比較文学研究を代表する著者が、日本語文学の地球規模への広がり、研究課題と展望を問題提起している一冊。旧来の「日本文学」は定住民の文学であったが、外地で生まれた「日本語文学」には広域的移動や越境を背景にした「移動民の文学」の様態が刻み込まれている。本書の第一章「日本語文学の拡散、収縮、離散」では、大陸、南方、北米/南米、台湾、沖縄など「外地」の文学作品を紹介し、世界の文学としての再構成を示唆している。(堀)

◆日本昔話と世界昔話

【6】稲田浩二『世界昔話ハンドブック』三省堂2004(4F開架新体系388.036//I51//3574)

世界昔話を学ぶための入門書。まず第一部で、昔話の源流は太古に遡り、各地で民族性に添って変化、発展してきたと説明され、第二部で、世界各地の代表的昔話が概略と解説により紹介されている。ヨーロッパやアジアのみならず、シベリア、アフリカ大陸、南北アメリカ、オセアニアの昔話なども紹介されていることが特徴である。全ての話に国際話型番号が付されて比較研究に便利である。第三部では、世界昔話の古典や研究史にも触れている。(高島)

【7】稲田浩二『日本昔話ハンドブック』三省堂2010(4F開架新体系388.1//I51//5892)

日本昔話を学ぶための入門書。第一部で日本昔話の特色、国際性、研究史、日本昔話の分布

地図が説明され、第二部で代表的な200話が概略と解説によって紹介されている。第三部では昔話の継承、普及について現代のストーリーテリングにも言及して解説されており、昔話を語る現代的意味も考えさせる。第四部では資料集、文献の目録が掲載されている。(高島)

【8】小澤俊夫『昔話のコスモロジー』講談社
1994 (3F文庫版388/097/7476)

日本を含めた世界各地の昔話に見られる人間と動物との婚姻譚を比較考察した研究書。「猿婿入り」、「鶴女房」、「天人女房」などの日本の代表的な異類婚姻譚をヨーロッパだけでなく、エスキモーなどの自然民族を含めた世界各地の民族の類話と比較することにより、日本昔話の特徴とそこに表れる日本人の動物観を明らかにしている。昔話の比較文化的研究の手本となる好著である。(高島)

【9】ステイス・トンプソン『民間説話：世界の昔話とその分類』八坂書房2013 (4F開架新体系388/TH6/7269)

民間説話研究の古典的名著、バイブルと呼ばれる *The Folktales*(1946)の翻訳である。本書は1977年に社会思想社から出版された『民間説話一理論と展開』の新版である。前半では、アイルランドからインドまでの代表的な民間説話を取り上げ、その歴史や分布、さらにそれぞれの説話の研究成果を整理解説している。後半では、北米のネイティブ・アメリカンの説話群を重要なものとして取り上げ、ヨーロッパ、アジアの説話との比較を行っている。(高島)

【10】鶴野祐介編『日中韓の昔話：共通話型三〇選』みやび書店2016 (4F開架新体系388.1/U77/2069)

日中韓の研究者で構成されるアジア民間説話学会の会員による共同執筆である。三カ国共通話型から三〇話型が選ばれ、各国の代表話を一話ずつ、合計九〇話のテキストが話型ごとの解説とともに載せられている。東アジアの昔話の共通性と多様性が一望できるように構成されている。「遠くて近い」三カ国の隣人が一緒に読み、対話したい一冊である。(高島)

【11】ハンス＝イェルク・ウター『国際昔話話型カタログ：分類と文献目録』小澤昔ばなし研究所2016 (2F参考 (一般) 388/U96/9397)

The Types of International Folktales 第2版(2011年)の話型記述、注、索引の全訳。「文献/類話」「モチーフ一覧」「文献一覧」などは原文のまま掲載されている。A.アールネ/S.トムソンの『昔話の話型 (*The Types of the Folktales*)』(略称AT) (1961)を増補改訂した国際的な昔話話型カタログであり、従来のカタログより、日本の資料が大幅に増え、日本昔話と世界の類話との比較研究には必須の書物である。このカタログの略称はATU。(高島)

【12】Michael Foster. *Pandemonium and Parade: Japanese Monsters and the Culture of Yōkai*, UC Press, 2009. (7F新体系388.1/F41/4971) (Tierney)

◆世界文学としての日本近代文学

【コレクション展示】*図版は表紙に掲載

①芥川龍之介,塩尻清市訳『KAPPA』秋田屋1947 (B2中央旧913.6/A7/9)

芥川龍之介「河童」(1927年発表)の英訳本。塩尻清市訳。大阪市立大学初代学長で芥川の親友、恒藤恭による日本語序文つき。「河童」は戦前にも中国語・ドイツ語訳などがあるが、英訳の刊行は本書が初めてであったようだ。恒藤の序文には、大正の初期に芥川がしばしば河童の絵を描いていたとある。芥川が河童の絵を描き始めたのは大正九(1920)年頃と言われており(安藤公美「マルチメディア時代の芥川龍之介の表象」『芥川龍之介研究』第12号など)、本書序文の証言はその定説を数年遡る貴重なものである。河童という、英語圏では知られていないものを理解してもらうため、訳者は江戸時代の文献を引いて河童そのものの詳しい解説“THE KAPPA IN THE JAPANESE FOLKLORE”も付している。(奥野)

〔訳〕This is an English translation of *Kappa* (published 1927) by Ryūnosuke Akutagawa. It was translated by Seiichi Shiojiri. The book includes a Japanese preface by Kyō Tsuneto, the first president of Osaka City University and a close friend of Akutagawa's. *Kappa* was also translated into Chinese and German before World War II, yet this seems to have been the first published English translation. Tsuneto's preface states that Akutagawa often drew illustrations of *kappa* (an aquatic creature in Japanese folklore) in the early Taishō period. Akutagawa is said to have begun drawing *kappa* illustrations around Taishō 9 (1920) (Masami Andō, "Representation of Ryunosuke Akutagawa in the multimedia era" *Akutaga REVIEW*, 12, etc.); the evidence in the preface of this book is valuable, as it dates back several years before this established theory. The translator added a detailed commentary titled "Kappa in Japanese Folklore," where he refers to Edo-period literature to help readers understand *kappa*, which is unknown in English-speaking countries.

②恒藤恭『商大学長時代日記』昭和二十一年1946

恒藤恭が、芥川龍之介「河童」の英訳本「KAPPA」に寄せた序文の原稿を、訳者塩尻清市に渡したという記載のある日記。昭和二十一年八月の記載では、まず同2日に塩尻氏と「KAPPA」刊行元である秋田屋の二人が来訪。

この時に序文を頼まれたらしい。同10日・17日には自ら阿倍野の秋田屋を訪ね、11日にも塩尻氏来訪、そして19日に「塩尻氏来訪 (Kappa序をわたす)」とある。この日記は『恒藤恭「商大学長時代日記／公演等レジュメ」(1946・1947年)』(恒藤記念室叢書7、2018年3月)として刊行された。序文では戦後を意識し、今後の日本人は西洋文化の理解に努め、日本文化を欧米に理解してもらうことにも努めるべきで、その点から「河童」の英訳は喜ばしい、と述べている。(奥野)

〔訳〕 This is a diary that records that Kyō Tsuneto gave the manuscript of his preface for *Kappa*—the English translation of Ryūnosuke Akutagawa's work—to its translator, Seiichi Shiojiri. In an entry dated August Shōwa 21 (1946), Shiojiri and another person from Akitaya, the publisher of *Kappa*, visited Tsuneto on the 2nd. This was apparently when Tsuneto was asked write a preface. On the 10th and 17th, Tsuneto visited Akitaya in Abeno Ward in person. Shiojiri also came to visit on the 11th, and it says that "Shiojiri came to visit (delivered the *Kappa* preface)" on the 19th. This diary was published as *Kyō Tsuneto: Diary during My Time as President of Osaka University of Commerce / Résumé of Public Events, etc. (1946 and 1947)* (Kyō Tsuneto Memorial Room Monograph 7, March 2018). The preface, written in a postwar context, states that Japanese people should, from now on, make an effort to understand Western culture and should help the West understand Japanese culture, which is why the English translation of *Kappa* is welcome.

③松村みね子『愛蘭戯曲集 第一巻』玄文社 1922 (個人蔵)

アイルランド文学の翻訳で知られる松村みね子(歌人・片山廣子)が、「私の持つてみた古い訳に、今まで読んだものゝ中から比較的にみじかいもので自分に訳しそうなものを選んで訳し加へた(本書あとがき)」戯曲集である。みね子の翻訳には、高い英語力と日本語に対する歌人としての優れた言語感覚が発揮され、森鷗外や坪内逍遙からも高く評価された。

また、当時は日本語に訳しづらかった語に対しても、丹念に調べつつ探求を続けていた姿勢がうかがえる。たとえば、本書所収のイエイツ作「心のあこがれる國」に登場する fairy (現在では一般に「妖精」と訳される)は、ここでは「魔(フエヤリー)」と訳されているが、本作品が『近代劇全集』(昭和二年)に収載された際に「フエヤリイ」に変更されている。(永井)

〔訳〕 This is a collection of plays translated by Mineko Matsumura (the poet Hiroko Katayama), who is known for her translations of Irish literature. In the afterword, she writes, "I selected relatively short pieces from what I have read that seemed translatable, translated these, and added them to

older translations I had made." Mineko's translations demonstrate the application of a poet's excellent linguistic talent and advanced English and Japanese skills—they were highly regarded by Mori Ōgai and Tsubouchi Shōyō.

We can see Mineko's approach of carefully researching and exploring words that were difficult to translate into Japanese at the time. For example, the term *fairy* that appears in Yeats's "*The Land of Heart's Desire*", included in this volume, was translated with the character ma (魔) (nowadays it is generally translated as *yōsei* [妖精]). However, when this volume was included in the *Complete Works of Modern Drama* (Shōwa 2 [1927]), this translation was changed to a transliteration of *fairy*.

④Toussaint, Franz. *La Flûte de Jade*, Edition d'Art H. Piazza, 1922. (新着図書)

フランス語の書。1922年の再版(初版は1920年)。縦15.5×横11糎。副題は「POÉSIES CHINOISES」(中国の詩)。フランス語タイトルの下に中国語題目「玉笛」がある。中国の周(B.C.1046~B.C.256)の時代から清(A.D.1636~A.D.1912)の時代までの詩170首を収録。表紙を捲って三頁目(展示頁)に日本で500冊発行されたことを記録、右に富士山に中国の古代女性らしい絵が掲載。表紙を捲って四頁目に「A LA MÉMOIRE DE TSAO-CHANG-LING」(Tsao-Chang-Lingについての思い出)との表題で、これらの詩は故人となったTsao-Chang-Lingという人が選択し、翻訳したことを記録。が、詩の選び方などから見ると、この本はジュディット・ゴーチエ(Judith Gautier, 1845-1917)の *Le Livre de Jade* (『玉書』1867)の模倣作であることがはっきりとわかる。実際にも『玉書』の漢詩訳詩を少しだけ改作したものをたくさん見られる。日本の作家堀辰雄はこの本を典拠として未発表ノート「支那古詩(一)」(『堀辰雄全集 第七巻(下)』1980筑摩書房)を作成している。(劉)

〔訳〕 This is a French book and a 1922 reprint (the first edition was published in 1920). Its subtitle is *Poésies Chinoises* (Chinese Poetry). The Chinese heading *Yudi* (The Jade Flute) is written under the French title. It contains 170 poems from China, from the Zhou (B.C.1046~B.C.256) dynasty to the Qing (A.D.1636~A.D.1912) dynasty. The third page (exhibition page) from the cover states that 500 copies were published in Japan, and a picture of what appears to be Mount Fuji and a woman from ancient China is inserted on the right. The fourth page is titled *A La Mémoire de Tsao-Chang-Ling* (In remembrance of Zao Zhangling); these poems, it is stated, have been selected and translated by the deceased Zao Zhangling. However, given the way in which the poems were selected, it is clear that this book is an imitation of *Le Livre de Jade* (The Jade Book 1867)

by Judith Gautier (1845-1917) . It is evident that many poems are just slightly adapted versions of poems from the Chinese poems of *The Jade Book*.

The Japanese writer Tatsuo Hori has written unpublished notes based on this book titled *Chinese Ancient Poems (I)* (Hori Tatsuo Zenshū, Part 7 [Second Volume], 1980 Chikuma Shobō).

I 日本近代文学研究ことはじめ

【13】日本近代文学会編『ハンドブック日本近代文学研究の方法』ひつじ書房2016 (3F開架新体系910.26/N71//0526)

本書は、日本近代文学会の機関誌に連載された「フォーラム方法論の現在」特集(2013-2014)を基に編纂したものである。日本の近代文学研究で一般的と考えられている方法論—たとえば、テキスト論、語り論、作品論、作家研究やメディア研究などの27項目—が語られている。「世界文学」を考える際に、日本近代文学を軸に比較構想してみるのが良いのではないか。(堀)

【14】Seth Jacobovitz. *Writing Technology in Meiji Japan: A Media History of Modern Japanese Literature and Visual Culture*, Harvard Asia Center, 2015. (7F新体系910.26/J12//4970) (Tierney)

【15】上田博他編『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社1997 (3F開架新体系910.26/U32//3317)

本書は「近代文学を学ぶこと」、「作家論・作品論の可能性」、「文学を研究する可能性」、「論文・レポートはどう書くか」という四つの章に分けられている。日本近代文学とは何であるのか、そしてそれを研究するとはどういうことであるのか、この本はわれわれにその答えを提示してくれているかも。(劉)

【16】三好行雄編『近代日本文学史』有斐閣1975 (B2中央旧910.26/M18//3)

テキストとして編纂された書物である。全体は九章に分けられている。近代への過渡期から戦後文学に至るまでの日本近代文学の流れが紹介されている。従来の旧套な文学史観から脱し、外国文学の影響を強調するよりは、日本の近代文学の風土と動態の内部に立ち返って、新たな視点から日本近代文学の体系を我々に提示している。(劉)

II 西洋・アジアとの出会い

【17】鈴木暁世『越境する想像力—近代日本文学とアイルランド』大阪大学出版会2014 (3F開架新体系910.26/SU96//0757)

十九世紀末のアイルランドでは、イギリスからの独立を目指す政治運動を背景とする「アイ

ルランド文芸復興運動」が高まり、それにより生まれたイェイツやシングの作品は、近代日本においても注目された。本書は日本におけるアイルランド文学受容の歴史的背景や網羅的な年表の他、芥川龍之介や菊池寛といった文学者の作品とアイルランド文学との関わりを個々に詳細に論じている。(永井)

【18】井村君江『妖精学入門』講談社現代新書1998 (4F新書版388.33/I49//7483)

イギリスやアイルランドを中心に伝承され、また文学や美術、演劇や音楽作品にも描かれてきた「妖精」の全体像を概観する。「妖精」は文学や芸術作品の糧となる、ひとつの重要なモチーフであることがわかる。著者は、室生犀星や日夏耿之介ら文学者とも交流のあった妖精学者であり、現在は「妖精」と訳されるfairyが、近代日本においてどう訳されていたのかについても触れている。(永井)

【19】芦谷信和他編『作家の世界体験：近代日本文学の憧憬と模索』世界思想社1994 (3F開架新体系910.26/A92//1549)

『作家のアジア体験』の姉妹編である。森鷗外、夏目漱石、永井荷風、有島武郎、二葉亭四迷、島崎藤村、蘆花徳富健次郎、石川達三、武者小路実篤、尾崎行雄、三島由紀夫、堀田善衛の十二人の西洋体験を章ごとに紹介している。本書に登場している十二人の作家たちが、どのように西洋を歩いたか、追体験してみませんか？(劉)

【20】村松定孝, 紅野敏郎, 吉田熙生編『近代日本文学における中国像』有斐閣1975 (B3中文学302.22/M//中文学)

本書は近代日本の文学者たちが表現した、中国についてのイメージの抄録と解説である。三つの章に分けられ、時代の流れに従って、明治・大正、昭和、戦後の日本近代文学における中国像を記述している。中国を一つの鏡として近代日本文学の特性の一端を映している点も一つの読み所である。(劉)

【21】W.L.シュワルツ著, 北原道彦訳『近代フランス文学にあらわれた日本と中国』東京大学出版社1971 (B2中央NN950/S4//1)

本著は近代フランス文学の中で、想像力を駆使してどのように中国と日本を解釈しているか、また主としてどのように言及しているかを包括的に研究したものである。本書の四章は四つの時代区分にあてられ、それぞれの時代における日中両国への関心のありかたを記述している。フランスではわれわれの国の文化がいかに解釈されてきたかを知ってみませんか？(劉)

【22】中島健蔵編『近代日本文学における外国文学の影響』河出書房1953 (B2中央旧918/K3//2)

近代日本文学は外国の影響を除いては考えられないと言えよう。本書は時代の流れに沿って、日本近代文学における欧米文学の影響を中心に述べている。日本近代文学は如何に外国文学と接触、それを消化吸收し、自分なりに理解してきたか。さらに、具体的に日本近代文学のどのような点から外国文学の影響を認めることができるか。まずは読んでみませんか？（劉）

Ⅲ 翻訳と日本近代文学

【23】古谷智子『片山廣子一思ひいづれば胸もゆるかな』本阿弥書房2018（7F新体系911.162//F95//4980）

歌人で翻訳家、小説や随筆も書いた片山廣子（明治十一年一昭和三十三年）の作品世界にみられる特質を、短歌を中心にしてつづつ翻訳や散文も丁寧に参照しながら探求している。廣子の短歌と、彼女が翻訳したアイルランド文学との共通性に関する指摘もある。また、芥川龍之介の最後の恋人として知られる廣子だが、芥川へ宛てた手紙の内容から廣子の思いを読み解く一章も含まれている。（永井）

【24】藤岡啓介『翻訳者あとがき讃一翻訳文化の舞台裏』未知谷2016（3F開架新体系801.7//F65//0259）

明治から平成までの翻訳作品の「あとがき」や解説と、訳者に関する紹介からなる。訳者が「何を選びどのように訳出したのか、そのすべて」が、あとがきや解説に含まれていると著者はとらえる。なお、片山廣子の勧めにより村岡花子が翻訳したといわれる『王子と乞食』（マーク・トウェイン原作）の訳者解説も取り上げられており、その文章には原作に対する花子の真摯な姿勢が読み取れる。（永井）

【25】村岡恵理『アンのゆりかご一村岡花子の生涯』新潮文庫2014（7F新体系910.268//NU55//4979）

『赤毛のアン』シリーズの翻訳で知られ、平成二十六年にはNHKの連続テレビ小説にも描かれた翻訳家・村岡花子（明治二十六年一昭和四十三年）の生涯を、孫が描く評伝。児童書の翻訳に情熱を注いだ花子をめぐる人間関係や文学的背景も詳しく書かれている。また、片山廣子は同じ女学院出身の先輩にあたり、花子の翻訳活動に影響を与えた人物であることにも触れている。（永井）

【26】鴻巣友季子『明治大正 翻訳ワンダーランド』新潮選書2005（4F新書版910.26//KO78//2757）

明治大正期の翻訳作品を、小説や戯曲、児童文学やノベライゼーション（映画の脚本の小説化）など多様なジャンルにわたって取り上げている。自然な会話文に訳すための工夫や、訳語を選ぶうえでの悩みなど現代にも通じる問題の

他、翻訳を装った創作、結末の書き換え、意図的な誤訳など、明治大正の翻訳が「なんでもあり」のワンダーランドであったという一面を紹介している。（永井）

Ⅳ 漱石・龍之介と世界文学

【27】フェリス女学院大学日本文学国際会議実行委員会編『世界文学としての夏目漱石』岩波書店2017（3F開架新体系910.268//F22//7810）

夏目漱石の没後100年を記念して開かれた国際シンポジウム（2016年12月8日～10日）の報告論文集。「はじめに」で佐藤裕子氏は「世界文学の読者・夏目漱石が、小説家・夏目漱石となり、その夏目漱石の作品が今度は世界文学となって、世界中の読者に読まれている構図が一目で理解できる」内容を目指したという。漱石翻訳作品一覧などデータも豊富。（奥野）

【28】『芥川龍之介作品論集成別巻・芥川文学の周辺』翰林書房2001（3F開架新体系）

世界文学としての芥川文学を考える上で、本書第3章「外国における芥川龍之介研究」が有益である。アメリカ、イギリス、イタリア、ロシア、韓国、中国における芥川研究の現状が各国研究者により報告され、上記以外の諸外国における研究状況も畠田明子氏によってまとめられている。畠田氏による「芥川作品各国翻訳状況一覧」で1999年までの翻訳状況がわかる。（奥野）

【29】平岡敏夫『芥川龍之介と現代』大修館書店1995（3F開架新体系910.268//H67//6861）

著者が1987年にアメリカ・ディキンソン大学で芥川文学を英語、英訳テキストで講義した経験から、芥川文学の現代的、世界的意義を論じた研究書。「羅生門」「藪の中」「蜜柑」などの主要な作品を〈アメリカの学生はどう読んだか〉という視点で報告、分析している。日本の大学生や高校生の読みとの比較分析や、翻訳が読みを左右する具体例も興味深い。（奥野）

【30】Jay Rubin(trans.&ed.) *Rashomon and Seventeen Other Stories*, Penguin Classics, 2009. (5F多読913.6//A39//5728)

村上春樹の翻訳者として知られるジェイ・ルービン氏が、芥川作品の中から選び訳した翻訳選集。村上春樹が長文の序文を寄せたことで日本でも注目され、本書の日本語版『芥川龍之介短編集』（新潮社2007年）も出された。敢えて訳されなかった部分もあり比較読みも楽しい。同書の訳者序文でルービン氏は芥川を「世界文学」の作家として評価している。なお本書にはコミック風カバーのDeluxe Editionもある。（奥野）

【31】Jay Rubin(trans.&ed.) *The penguin book of japanese short stories*, A Penguin Classics

Hardcover, 2018. (5F英語913.68//P37//9834)

ジェイ・ルービン氏編（訳者複数）の日本文学翻訳選集。漱石・鴎外から新進作家澤西祐典まで、対象は明治以降現在に至る。章ごとにテーマがあり、最終章では関東大震災から原爆、戦後の混乱期、阪神淡路大震災、東日本大震災までの災害、戦災を扱った文学を集め、本書を通して日本近代史が読める。村上春樹が本書にも序文From Seppuku to Meltdown を寄せている。（奥野）

◆日本近代文学における交流と衝突

【コレクション展示】*図版は表紙に掲載

⑤Walt Whitman. *Leaves of Grass ; Including a Fac-simile autobiography variorum readings of the poems and a department of Gathered Leaves.* Philadelphia : David McKay, 1900c. (B 3 生活科学/932//W1/C1//1)

ホイットマン(1819-1892)の『草の葉』初版は1855年で、最晩年まで改稿し続けたため、さまざまな版が存在する。アメリカ文学やアメリカ詩史のなかで最重要であるのみならず、世界文学として破壊的影響力をもつ。民主主義と、人間の靈魂と肉体の新しい考え方、口語自由詩の新境地を世界に拓いた。

ホイットマンについては、当初、毀誉褒貶が激しかったが、ラファエロ前派のW.M.ロッセティが『ホイットマン選集』(*Poems by Walt Whitman/John Camden Hotten:London,1867*)を出して以降、ヨーロッパの象徴主義者らから大いに称賛されるようになる。夏目漱石が論文「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』Walt Whitmanの詩について」を書いたのは、1892年10月、25歳の時。(漱石が種本としたのはCanterbury Poets版の*Poems of Walt Whitman*(1886)である。)野口米次郎はアメリカ西海岸で1896年春ごろから英詩を書き始めるが、彼の英詩は《東洋のホイットマンのように宇宙的で個人的である》と評された。実際、野口の英詩はE.A.ポーとホイットマンと松尾芭蕉の影響が色濃い。その他、金子筑水、高山樗牛、内村鑑三、白鳥省吾ら、影響を受けた日本文学者は枚挙にいとまが無い。

今回展示するD.McKay版は、本学が所蔵する多数の版の『草の葉』のなかでも最も古い一冊で、ホイットマンのサイン入り肖像写真や、ホイットマン自筆の書誌の複写が綴じ込まれた豪華版である。この版は、柳宗悦、富田碎花、有島武郎が愛用した版として知られる。(堀)

〔訳〕The first edition of *Leaves of Grass* by Whitman(1819-1892)was printed in 1855; various editions exist, as it was continuously revised by Whitman until the end of his life. Not only is it of paramount importance in American literature and the history of poetry, but it has also had a pervasive

influence on World Literature. Globally, it pioneered new ground in free verse, as well as presenting a new way of thinking about Democracy and the "body and soul" of human nature.

Initially, the response to Whitman was a mix of intense praise and criticism, but he came to be greatly praised even in Europe after his reevaluation by W. M. Rossetti of the Pre-Raphaelite Brotherhood. Sōseki Natsume wrote the essay "On the Poetry of Walt Whitman: An Egalitarian Poet" in October 1892, when he was 25 years old. Yonejirō Noguchi began writing English poetry on the American West Coast from around the spring of 1896. His English poems were described as "cosmic and personal—like a Whitman of the East."

The D. McKay edition on display this time is the oldest of the many copies of *Leaves of Grass* held by Osaka City University. It is a deluxe edition that contains a signed photographic portrait of Whitman and a copy of his handwritten bibliography. This edition is known to have been cherished by Muneyoshi Yanagi, Saika Tomita, and Takeo Arishima.

⑦幸徳秋水『兆民先生』博文館1902 (7F文庫289//KO94//5809//小島文庫)

This is the first edition of Kōtoku Shūsui's tribute and homage to his teacher Nakae Chōmin, translator of Rousseau's *Social Contract* and key thinker and journalist in the Freedom and People's Rights Movement. Kōtoku had edited Chōmin's final opus, *One Year and a Half* for the Hakubunkan publishing the previous year. Partly memoir and partly hagiography, *Chōmin Sensei* is an important source of information about Chōmin's life. In addition, Kōtoku claims the mantle of legitimate inheritor of Chōmin's radical democratic thought.

(Tierney)

〔訳〕本書は、幸徳秋水が師、中江兆民にささげたオマージュの初版である。兆民は、ルソーの『社会契約論』の翻訳者であり、自由民権運動における重要な思想家であり、ジャーナリストであった。幸徳は、前年、兆民の最後の著作『一年有半』を博文館のために編集していた。

『兆民先生』は、回顧録でもあり、「聖人伝」でもあり、兆民の生涯を知るための重要な手がかりでもある。さらに幸徳は、自らが兆民の急進的な民主思想の正統的後継者であることを主張している。

⑥野口米次郎『日本詩歌論』白日社1915 (7F文庫911//NOG//MORI)

本書は、*The Spirit of Japanese Poetry*(1914)の邦訳版である。原書はロンドンのジョン・マレー社から〈東洋の英知シリーズ〉の一環として出版されたもので、野口米次郎の英国講演(1913年末から翌2月)が基になっている。ロン

ドン日本協会での「日本の詩歌」、オックスフォード大学での「日本の俳句」、王立アジア協会での「能楽の伝統美」などの講演録が収録されており、これらは当時の英国聴衆の反応を含めて、その後の野口の著作で繰り返し言及されるものになる。当時の英国では、既に日本文化に対する関心が高まっていたが、日本詩人の登壇は稀有で、その哲学的な詩歌の解説は多大な反響を呼んだ。この邦訳版は、加藤朝鳥の計画で野口本人と加藤が共訳したもので、日本においても話題になって初版は直ちに売り切れて再版された。当時、この本については、さまざまな立場の日本の論者が白熱した批評を繰り返した。

(堀)

〔訳〕 This book is a Japanese translation of *The Spirit of Japanese Poetry* (1914). The original was published by John Murray in London as a part of the Wisdom of the East series—it is based on Yonejirō Noguchi's lectures in the United Kingdom (from late 1913 to February 1914). It includes records of lectures such as "Japanese Poetry" at the Japan Society, "Japanese Hokku Poetry" at the University of Oxford, and "No: The Japanese Play of Silence" at the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. These are repeatedly mentioned in Noguchi's later works, including the reactions of the British audiences. Interest in Japanese culture was already growing in the United Kingdom at that time, although it was rare for a Japanese poet to give a lecture—Noguchi's philosophical explanations of poetry caused a sensation and good reputation. This Japanese translation was jointly translated by Noguchi himself and Asadori Katō, with Katō planning the project, and it attracted public attention in Japan as well. The first edition sold out immediately and was promptly reprinted. It was subject to heated critique by Japanese authors from a variety of standpoints.

⑧カール・マルクス著、生田長江訳 『資本論』
緑葉社 1919 (B2中央旧 331//M1-1//23-1)
(Tierney)

⑨幸徳傳次郎『幸徳秋水評論集』解放社1929
(B2中央旧304//K26//1A) (Tierney)

【32】細川周平編『日系文化を編み直す：歴史・文芸・接触』ミネルヴァ書房2017 (4F開架新体系334.51//H94//8181)

国境を越えた「日本人」「日系人」「移民」の芸術や文芸について、それぞれの土地と時代のなかで問い直している。日本から輸入した雑誌や連載小説をいかに受容し再生産したか、収容所や移民社会で自分史と集団史をどう記述して固有の日本語文学が生み出されたか。小説や俳句のみならず、映画、マンガ、音楽まで広がる日本文学ジャンルの越境性が問題にされる。

(堀)

【33】Robert Thomas Tierney. *Monster of the Twentieth Century: Kōtoku Shūsui and Japan's first anti-imperialist movement*, University of California Press, 2015. (アジア都市文化学 309.7//TI2//4452) (Tierney)

【34】Robert Thomas Tierney. *Tropics of Savagery*, University of California Press, 2010. (アジア都市文化学 334.51//TI2//4493) (Tierney)

【35】Davinder L. Bhowmik and Steve Rabson (eds.) *Islands of Protest : Japanese literature from Okinawa*, University of Hawai'i Press, 2016. (アジア都市文化学 910.29//I84//4494) (Tierney)

【36】Keith Vincent. *Two-Timing Modernity: Homosocial Narrative in Modern Japanese Fiction*, Harvard Asia Center, 2012. (7F新体系 910.26//V75//4973) (Tierney)

【37】Michele M. Mason and Helen J.S. Lee(eds.) *Reading Colonial Japan: Text, Context, and Critique*, Stanford Univ. Press, 2012. (7F新体系334.51//R21//4969) (Tierney)

【38】Michiko Suzuki. *Becoming Modern Women: Love and Female Identity in Prewar Japanese Literature and Culture*, Stanford Univ. Press, 2010. (7F新体系 910.26//SU96//4968) (Tierney)

◆日本古典文学と世界

【コレクション展示】*図版は表紙に掲載
⑩呉兢『貞観政要』吉文字屋定栄堂、江戸時代後期 (7F文庫125.3//GOK//FUKUDA)

縦27.1×横18.9㎝。袋綴装。巻五裏表紙見返しに付された広告には、「文化戊辰」(文化五年<1808>)の年号が記されており、江戸後期刊かと推定される。

唐の第二代皇帝、太宗(598~649)の言行録。唐の呉兢(670~749)撰。全十巻より成る。既に唐代には日本に将来されていたことが、平安中期の漢籍目録である『日本国見在書目録』の記載より知られる。

太宗のもとには賢臣が集い、太宗はかれらの諫言をよく聞き入れ、善政を施した。その治世は後代、中国だけでなく、日本においても規範とされた。その太宗の言行を記した本書は、いわば帝王学の書として、日本の皇族や貴族、武士といった人々に広く愛読された。

さらに、『貞観政要』に由来する表現や逸話は、『平家物語』や『太平記』といった文学作品にも散見し、本書が日本文学に与えた影響は計り

知れない。また鎌倉時代、北条政子の要請を受けた儒学者菅原為長によって、本書の和訳もなされた(『仮名貞観政要』)。海外文献の翻訳の歴史という観点からも、注目すべき文献であるといえよう。(大坪)

〔訳〕 This is a record of the words and deeds of Emperor Taizong of Tang (598~649), the second emperor of the Tang dynasty. It was compiled by Wu Jing (670~749) and is comprised of 10 fascicles. The mid-Heian *Nihonkoku Genzaisho Mokuroku* (Catalogue of Present Books in Japan) shows that this book had reached Japan by the era of the Tang dynasty.

The ministers gathered around Taizong, who listened closely to their admonitions and governed well. His reign served as a model to posterity not only in China but also in Japan. This book, which records Taizong's words and deeds, has been widely read by people in Japan, such as the imperial family, aristocracy, and samurai, and regarded as a guide to be a good emperor.

Furthermore, expressions and anecdotes that originate from *Jōganseyō* appear in literary works such as the *Heike Monogatari* (The Tale of the Heike) and the *Taiheiki* (Chronicle of Great Peace); the extent to which this book influenced Japanese literature is immeasurable. This book was also translated into Japanese by the Confucian scholar Sugawara no Tamenaga at the behest of Hōjō Masako in the Kamakura period (*Kana Jōganseyō*). As such, this book is also noteworthy in the history of foreign-literature translation.

⑩『大江千里集』江戸時代中期(7F文庫 911.148/OEC/MORI)

写本一冊。袋綴。縦23.5×横16.7糎。赤茶地紙表紙の左肩に題簽を附す。外題「大江千里集」。内題「大江千里集」。全二五丁。行数一面八行書。和歌は一首二行。

本書は大江千里の歌集。別名『句題和歌』。千里は平安前期の漢学者、歌人。生歿年未詳。寛平六年(894)に、宇多天皇の勅命により歌集を完成させた。序には「僅かに古句を搜して、新歌を構成す」とあり、漢詩の名句を題として和歌を116首詠み、最後に詩句を題としない「自詠」10首を加える。詩句を題とする和歌は、詩句の内容を、そっくりそのまま詠むことが多い。本書が編まれた当時は、漢詩の内容や表現が、和歌に盛んに撰取されていた。千里集は、当時の好尚に合わせた、最先端の試みだったのであろう。展示する本は、朱、代赭で注記を書き入れ、藍墨にて詩句の出典詩を記す。末尾に「従六位上藤原永広」の署名がある。(山本)

〔訳〕 This book is a poetry anthology by Ōe no Chisato and is otherwise known as the *Kudai Waka*. Chisato was a Sinologist and poet of the early Heian period. His years of birth and death are unknown. He completed the anthology in Kanpyō 6

(894) on Emperor Uda's command. The preface states, "I selected verses of people from the past and combined them with new poems." He composed 116 *waka* poems themed on famous quotations in Chinese poetry, then added 10 self-composed poems not themed on verses. The *waka* poems themed on verses tend to mirror verse content literally. The content and expressions of Chinese poetry were heavily used in *waka* poetry when this book was compiled. *Chisatoshū* was a cutting-edge approach that was made to match the style of the time. The book on display has notes written in vermilion and Venetian red ink, and source poetry of verses written in indigo ink. The end of the book includes the signature *Jūrokujō* (Upper Junior Sixth Rank) *Fujiwara no Nagahiro*.

⑪『新撰萬葉集』江戸時代前期(文・国文学 911////国文学)

写本。列帖一帖。縦25×横18糎。縹色無地表紙の中央に題簽を附す。外題「詩歌」。内題「新撰萬葉集上」。本文は鳥の子紙両面書きで三折五〇丁、うち墨付四七丁。行数一面十行書。和歌は一首一行。朱、墨で、訓点、異本注記、集付を書き入れる。

本書は、上下二巻からなる。上巻の序は寛平五年(893)という年を記す。上巻の選者は、菅原道真といわれ、『菅家萬葉集』の別称を持つ。和歌は、万葉仮名という、日本語を表記するために表音的に用いた漢字で書かれている。また、上巻の序には「一絶の詩を綴りて、数首の左に挿さむ」とあり、和歌の左には、和歌を訳した漢詩が添えられる。本書の原型は、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が成立する直前に誕生している。平安初期の漢詩隆盛の時代を経て、その漢詩を背景として和歌が再び盛行したという事実をよく示す歌集といえる。大阪市立大学蔵本は、上巻の序を欠く。識語にもと烏丸光廣卿の蔵本であったと記す。(山本)

〔訳〕 This book consists of two volumes. The year Kanpyō 5 (893) is written in the preface of the first fascicle. Sugawara no Michizane is said to have selected the poems for the first fascicle, which is otherwise known as the *Kanke Man'yōshū*. The *waka* poems are written in *man'yōgana*, or *kanji* for phonetically transcribing Japanese. The preface of the first fascicle also states, "A Chinese quatrain was interposed to the left of the *waka* poetry," and Chinese poetry—translations of the *waka* poetry—have been added to the left of the *waka* poetry. A prototype of this book was created immediately before the *Kokin Wakashū*, the first *chokusen wakashū* (imperial commissioned *waka* anthologies), came into existence. This anthology well demonstrates that *waka* poetry became popular in the context of the Chinese poetry that flourished at the beginning of the Heian period. The copy held by the Osaka City University Library is missing the

preface of the first fascicle. The postscript states that the book used to belong to the court noble Karasuma Mitsuhiro.

I 軍記物語の普遍性

【39】日下力『「平家物語」という世界文学』笠間書院2017 (7F新体系913.434//KU82//4900)

人類の歴史は戦争の歴史といっても過言ではあるまい。戦いを語り継ぐ文学作品は世界各地に残されている。日本中世の軍記物語研究に長年取り組んできた著者は、それら戦いを描いた世界文学の数々に目を向け、日本が生み出した代表的な戦争文学『平家物語』との比較を通して、世界文学史上における『平家物語』の位置を見定めようとしている。(大坪)

【40】『太平記』研究国際集会編『『太平記』をとらえる 全3巻』笠間書院2014 (1巻3F開架新体系913.435//TA22//6671//西田蔵書, 2巻913.435//TA22//0535, 3巻913.435//TA22//0536)

(第1巻)南北朝動乱を描いた軍記物語『太平記』は知名度の高さにもかかわらず、基礎的な研究課題が未だ多く残されている書でもある。しかし近年では、『太平記』研究に取り組む海外の若手研究者も現れ始めている。こうした状況を踏まえ、広く海外の研究者も招いて『太平記』研究に残る課題を検討する集会在、2014年から2016年にかけて開催された。本書は、その初年度の成果を集成したものである。(大坪)

【41】井上泰至・長尾直茂・鄭炳説編『日中韓の武将伝』勉誠出版2014 (7F新体系302.2//I574899)

本書は、「戦争の人間学は、人文科学の重要な資源である」との提言に基づき、東アジア地域の武将伝の比較を手がかりとして「世界文学」を捉えようと試みている。日本の「武将・武士」、中国の「軍略家・武神」、韓半島の「救国の英雄」という三つのテーマを設定し、関連する論考15編が並んでいる。(大坪)

【42】青山学院大学文学部日本文学科編『日本と〈異国〉の合戦と文学』笠間書院2012 (3F開架新体系913.43//SA14//9421)

戦争を描いた古典である軍記物語は、源平合戦や南北朝動乱など、日本国内での戦いを扱ったものであるとのイメージが強い。しかし本書では、近世初期の薩摩藩による琉球侵攻を描いた作品群や、戦いの敗残者が異域に渡ったという伝承、朝鮮半島との国際関係を叙述した作品を対象として、日本人の〈異国〉認識に迫ろうとしている。(大坪)

II 世界における和歌文学研究

【43】ハルオ・シラネ [ほか] 編『世界へひらく和歌：言語・共同体・ジェンダー=Waka

opening up to the world : language, community, and gender』勉誠出版2012 (3F開架新体系911.104//SH84//8381) (山本)

【44】Helen Craig McCullough. *Kokin wakashū : the first imperial anthology of Japanese poetry*, Stanford Univ. Press, 1985. (3F開架新体系911.1351//KO43//4771) (山本)

【45】Helen Craig McCullough. *Brocade by night : "Kokin wakashū" and the court style in Japanese classical poetry*, Stanford Univ. Press, 1985. (7F新体系911.1351//MA13//4875) (山本)

【46】Laurel Rasplica Rodd and Mary Catherine Henkenius. *Kokinshū : a collection of poems ancient and modern*, Princeton Univ. Press, 1984. (7F文庫911.1351//KO43//9539//小島文庫) (山本)

【47】Robert H. Brower and Earl Miner. *An Introduction to Japanese court poetry*, Stanford Univ. Press, 1968. (7F新体系911.1//MI43//4876) (山本)

【48】Kenneth Rexroth. *One hundred poems from the Japanese*, New Directions, 1964. (B3英文学911//R//英文学)

No anthology of Japanese poetry has been more often translated into other languages than *Fujiwara Teika's Ogura Hyakunin isshu*. The first English translation, by Frederick Victor Dickins, was published in London in 1866, and the latest, by Peter MacMillan, was just published by Penguin Books.

The present English translation is by the American poet, translator, and essayist Kenneth Rexroth (1905-1982). Rexroth published numerous collections of his poetry, including *In What Hour* (1940), *The Phoenix and the Tortoise* (1944), *Collected Shorter Poems* (1967), and *Complete Collected Longer Poems* (1968). Although he did not identify himself as a "Beat", he was a central figure in the "Beats" poetic movement. His translations from the Asian classics were instrumental in bringing Asian poetry to a new generation of English-language readers. (Persiani)

〔訳〕日本の詩の撰集で、藤原定家の小倉百人一首以上に頻りに翻訳されたものはない。最初の英訳は、ヴィクター・ディキンズによるもので、1866年にロンドンで出版された。最新のものは、ピーター・マクミランによるもので、ペンギン・ブックスから出版されたばかりである。

この英訳版は、アメリカの詩人・翻訳家・エッセイストであるケネス・レックスロス (1905-1982) によるものである。レックスロスは、彼の詩の膨大な集成を出版し、そこには『何時に』(1940)、『不死鳥と亀』(1944)、『短詩集』

(1967)、『長詩全集』(1968)も含まれる。彼は自身を「ビート派」の一員と認めなかったが、ビート詩人運動の中心人物であった。彼が翻訳したアジアの古典は、アジアの詩を新世代の読者へ届ける手段であった。

Ⅲ中国文学の受容と日本文学

【49】渡辺秀夫『かぐや姫と浦島』塙書房2018 (7F新体系913.31//W46//4898)

平安時代前期に、初めて物語文学が生み出された。かぐや姫を主人公とする『竹取物語』である。月の都から来た、かぐや姫の創造には、中国文学における、仙人や仙境を描く小説の流行との関わりが想定されるのではないか。本書は、中国文学が、草創期の物語文学に果たした役割を解明する。(山本)

【50】上田純一『足利義満と禅宗』法蔵館2011 (3F開架新体系210.46//U32//9557)

足利義満は室町幕府第三代将軍として公武に君臨した。義満は禅を強く信仰していたことでも知られており、義満の治世を考える上で禅僧の活動は見逃すことができない。しかも当時の禅僧はしばしば日中を往来し、ときに外交の表舞台でも活躍する存在であった。本書は諸史料を駆使して、そうした義満期の社会における禅僧の実態と役割を明らかにしている。(大坪)

【51】湯沢質幸『古代日本人と外国語』勉誠出版2010 (3F開架新体系810.23//Y99//7299)

八世紀から九世紀、奈良時代から平安時代初期まで、日本人は、どのように外国語と付き合ったのか。本書では、主に日本人と中国語との関わりを、古代の教育制度、東アジアにおける外交用言語、通訳の待遇などの点から、多くの資料を駆使して解き明かす。会話力より文章読解力の方を評価するといった、現代に通じる指摘も興味深い。(山本)

【52】西山美香編『日本と《宋元》の邂逅』勉誠出版2009 (文・歴史学302.2//N87//9542)

本書はその題が示す通り、中世日本における宋・元文化受容の様相に焦点を置いた論考19編から成る。文学はもとより、宗教・建築・絵画といった様々な分野の専門家が結集し、当時の日本人が海外の文化をいかに受け止めたかという問題が、様々な角度から分析されている。こうした多角的な検討によって、盛んに海外文化を取り込もうとしていた中世日本の実像が浮かび上がってくる。(大坪)

【53】小島憲之『古今集以前』塙書房1976 (B2中央旧910.23//K35//4)

『萬葉集』の八世紀末までの歌と、十世紀初頭の『古今集』の歌とは、表現が異なる。『萬葉集』の歌は素朴、率直、『古今集』の歌は技巧的、理知的である。本書は、この相違の原因を、九世紀の中国文化讃美の時期における、朝廷および官人たちの漢詩を作る訓練の成果に求める。『古今集』の歌の表現の基づくところを明らかにした名著。(山本)

【54】小島憲之『上代日本文学と中国文学 上・中・下』塙書房1962-1965 (3F開架新体系910.23//KO39//1511,1512,1513)

本書は、飛鳥時代から奈良時代の文学、その流れを汲む平安時代初期までの文学を、中国文学との関連において考察する。日本文学の研究に、比較文学的方法を導入し、今日まで研究史において重要な意義を有する一書。(山本)

【55】小沢正夫『古今集の世界』塙書房1961 (B2中央旧911.135//O20//1)

『古今集』は、延喜五年(905)に、醍醐天皇の命令を受けて編纂された。以後、天皇の命令によって編まれた勅撰和歌集は二十一を数える。本書は、『古今集』が、どのような文学思潮の影響を受けて成立したのか、また、『古今集』の歌人や歌が、どのような意義をもっているのかを追究し、この集の特質を明らかにする。(山本)

平成30年12月3日発行

選書・解題担当 文学研究科プロジェクト「日本文学を世界文学として読む」

山本真由子(国語国文学・講師)／高島葉子(表現文化学・教授)／奥野久美子(国語国文学・准教授)／堀まどか(アジア都市文化学・准教授)／大坪亮介(大阪市立大学非常勤講師・UCRC研究員)／永井泉(国語国文学・後期博士課程)／劉娟(国語国文学・後期博士課程)／Robert Thomas Tierney(イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、東アジア言語文化学科、世界比較文学科、日本文学・教授)／Gian Piero Persiani(同校、東アジア言語文化学科、日本文学・講師)

編集協力 大阪市立大学学術情報総合センター

写真 studio giraff 橋本繁明

印刷 博進印刷株式会社

発行 大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 電話 06-6605-3114

UCRC
Urban-Culture Research Center